

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 15 日現在

機関番号：37402

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520461

研究課題名（和文）朝鮮労働党の言語管理による支配政策の基礎研究

研究課題名（英文）THE BASIC STUDY OF THE WPK'S RULE BY KOREAN LANGUAGE MANEGEMENT

\*WPK=The Workers' Party of Korea

研究代表者

矢野 謙一（YANO KENICHI）

熊本学園大学・外国語学部・教授

研究者番号：00271453

研究成果の概要（和文）：

本研究により文化語の基礎となる朝鮮語がいつの時期のものか、朝鮮語の諸方言がどれかを明らかにした。さらに方言の領域では文化語内での使用法を明らかにした。言語政策の基礎とされるチュチュエの言語理論については政治指導者の断片的な言葉を蒐集し、整理分類した上で、それぞれを正しいこととした上で、敷衍し解説したものであるが、言語政策での指針の役割をしている。言語政策の年表を作成し、言語政策の歴史が詳細にたどれるようになった。

研究成果の概要（英文）：

WPK creates 'cultural language' from the Korean of the 1900's and dialects in northern area in Korean peninsula. This study shows the vocabulary from the dialects used for giving expression to humiliate their enemies and to heighten xenophobia.

'Juche language theory', by the WPK for language planning was compiled by their political leaders, but it is an explanation of the leader's words, not language theory. Still it can be regarded as powerful dogma in DPRK

This study also compiled a chronological table to show the history of the language planning in DPRK .

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：朝鮮語・文化語・言語政策

## 1. 研究開始当初の背景

北朝鮮は自国語を「文化語」と称して朝鮮語を改良、改造して社会体制にあった言語を作る政策を行ってきた。この政策について日本や韓国では、語彙の領域で漢字語を固有語に置き換えること、外来語の使用を少なくする民族主義の立場からのものと主にとらえられていた。

本研究以前になした萌芽研究により、わが

国に所蔵されている北朝鮮の出版物をおおまかに調査した結果、民族主義の理念を言語に反映させるよりも、むしろ語彙整理は民衆に規範とすべき語彙を教育し、定められた語彙と文化語という管理された言語の使用を通じて支配政策を実現する意図があることが明らかになった。

特に繰り返し使われる語彙や表現には表にあらわれない様々な暗黙の了解があり、それ

を個々に読み解き、総合することで、北朝鮮で公刊された出版物から社会の実態を相当に読み取れることがわかり、本研究のテーマを定めた。

## 2. 研究の目的

北朝鮮は労働党の政策を大衆に浸透させるための重要な手段として「朝鮮文化語」あるいは近年では「平壤文化語」と呼びかえた政治のための言語を使っている。これは朝鮮語を土台にして文法、語彙を改造した言語である。

朝鮮労働党は1960年初より朝鮮語を「革命と建設の武器」と位置づけ、朝鮮語を「朝鮮文化語」を呼び換え、言語を為政者が管理することで、大衆の思考と行動を誘導することを試みてきた。「革命の武器」とは言語の真実を伝える機能を縮小し、政権支配に都合の良いように大衆を誘導するための道具のことであり、「建設の武器」とは交渉術を駆使して国際的に旧ソ連をはじめとしてさまざまな国から経済的な富を手に入れることを意味する。さらに、チュジョンフ(2005)『チュチュの言語理論』によると、金正日が権力を継承すると「朝鮮文化語」は「平壤文化語」と名を改め、朝鮮文化語の基本的性格を維持しつつ、平壤を中心とした文化の創造と人民を体制に奉仕させるための教化手段としての性格を強めている。

本研究は、朝鮮文化語と平壤文化語を研究の対象とし、「言語認識」、「言語開発」、「言語管理」、「技法」の4つの側面から接近を試みる。朝鮮文化語には「言語認識」、「言語開発」、「言語管理」の3つの側面から接近する。

「言語認識」とは北朝鮮で蓄積された言語学的知識がどのようなものかを探るものである。すなわち言語改造のため導入された言語学的知識、独自に開発された改造のための言語理論をさす。これは言語開発の基礎となる知識の解明と位置づけられる。

「言語開発」とは言語認識を応用し、情報管理や民衆意識の形成と意識操作、世論の誘導を効率よく行うための言語を開発することを意味する。この成果は、単語の改造、語彙の再編成、文体の開発に顕著に現われている。「言語管理」とは開発した言語を民衆に普及したあと、その言語が形態や意味で変化をおこさぬよう維持管理する技術をいう。このためには意味の管理には辞書、文法形態の管理には規範文法が作られている。これらの実際の運用がどうなっているかを義務教育の教科書を通して明らかにする。

「平壤文化語」に対してはさらに「技法」の側面から接近する。「技法」とは開発した言語を言語生活に浸透させる方法と言語生活で実際に使用させるための技術を言う。

「言語管理」と「技法」は今回の研究の核心をなすもので、これらは『朝鮮語学全書』の中で漠然とは述べられているが、明確に記述されていない。「言語管理」と「技法」は北朝鮮では言語学分野というより政治学の対象とされているようで、その一端は金日成総合大学の教科書『김일성주의 기초 (金日成主義基礎)』の「령도예술 (領導芸術)」の章にのべられている。領導芸術は the arts of leadership と英訳される概念で、その原則は「1人が10人を、10人が100人を、100人が1,000人を、1,000人が10,000人を言葉で動かす。」というものである。当初は扇動の技術とも理解されたが、上の教科書では言語の改造と言語の管理を前提とした理論の如く述べられている。北朝鮮内部では「령도예술이 높다 (領導芸術が高い)」という表現も時折使われており、体系的な記述はみられないものの、相当に進化した技術と予想され、これを言語の改造と「言語管理」、「技法」の観点から解明する。

## 3. 研究の方法

(1)研究の対象を北朝鮮での検閲を経て公刊され、その国内の書店にあり、かつ日本に持ち込まれた出版物に限った。いわゆる「秘密文書」や出所が確認出来ない印刷物、また対外宣伝用でその国内では頒布されていないものは対象としなかった。

(2)研究対象とする分野を言語認識、言語開発、言語管理、技法の4つの側面から解明しようとした。それぞれの側面については「研究目的」の項で述べた。

(3)言語認識では北朝鮮での朝鮮語研究の成果を時系列にそってたどることで本課題に関連する研究成果を探った。この領域は金日成総合大学の朝鮮語文学部および言語学科で使用されている言語学教科書と研究刊行物『朝鮮語文』掲載の関係論文を資料に用い、その全体像をつかむ。

(4)言語開発では「チュチュの言語理論」と称する分野の文献や論文を探り言語開発の方向を探った。『朝鮮語学全書』のうち語彙論関係分と1970年代以降活発に出版された語彙整理についての研究書および『朝鮮語文』掲載の関係論文を資料に用いて、語彙の分野における言語改造思想、形態の改造手法、意味の置き換えの手段、語彙の再編成を主に研究する。

(5)言語管理では言語認識の分野で浮き上がってきた言語改造に関する理論書や論文を読み、言語学的な基礎をつかむこととした。同時に文献にあらわれる言語政策に関する記事を年表として整理

することにした。

(6)技法では様々な出版物に当たり実際にどのように改造の成果が生かされているかを把握することにした。とりわけ教科書、歌詞など人民への教化手段に用いられる言語を分析しすることにした。

#### 4. 研究成果

(1)文化語が基礎とし、改造を加えている朝鮮語は1945年以降のものでなく、それ以前のもので、その改造の結果は話し言葉でなく、主にまず書き言葉にあらわれることがわかった。北朝鮮では文化語を民族的特性を持った言語としているが、これは日本の植民地化以前の言語を基にすることで、日本語の影響を受けない状態と近代の事物や制度をあらわす語彙をできるだけ日本語とは離れた語彙に置き換えたことを意味した。書き言葉にまずあらわれるのは、新しい語彙を耳からでなく目から浸透されるほうが媒体に威厳がある場合、効果的であるからと見られる。これは言語管理、技法の二つの領域から明らかにすることができた。

(2)文化語がもう一つの源とする朝鮮語の諸方言は西北、東北、六鎮、中部の開城方言が主たる源であることがわかった。方言から取り入れられた語彙は公布されるだけでなく、実際に教科書や漫画のなかで使用されていることを確認出来た。その使用における特徴は文化語を標準語から区別するための手段、卑劣さや憎しみを強調するための語彙であることがわかった。

これらの語彙は教科書や新聞で用いられると同時に、テレビやラジオと言った音声媒体でも普及が図られている。方言語彙を公用語に取り入れる範囲が感情の表現や非近代的な事物であることはこの言語政策の限界を示していると思われる。これは技法の分野での成果である。

(3)文化語の言語政策の基礎とされるチュチュエの言語理論は仮説を論理的あるいは実証的に論証しようとしたものでなく、「スリョン(首領)」、「リョンドジャ(領導者)」と呼ばれる人々の言語に関する断片的な言葉を蒐集し、整理分類した上で、それぞれを正しいこととした上で、敷衍し解説したものとわかった。これが言語政策での指針あるいは後ろ盾と成っている。「主体の言語理論」は民族語発展の理論と言語生活についての理論に大別できるが、前者は戦前から20世紀後半までに「スリョン(首領)」がその時々述べた言葉を時代別に整理して敷衍したもので、後者は「リョンドジャ(領導者)」が述べた言葉を中心にして、言語管理について敷衍した内容である。ただ、内容がどうであれ、北朝鮮では指導者のことばは法律と同様の価値があるとされるため、この理論は、同国において言語政策における教理として強い影響力をもっている。

これは言語認識、言語開発、言語管理の3つの領域から明らかになった。

(4)言語政策の年表を作成した。これにより言語政策の歴史が詳細にたどれるようになった。データは出版物に言語関係の出来事で年月あるいは年月日が書かれているものである。さらに、これにより公刊された出版物に書かれた事柄は同じデータベースからとられたもので、たまに個人的な記録によるものであることまでわかった。データベースがなんであるかは探求中であるが、一般に『金日成全集』の日付を軸にたどると遡求できることがわかった。ただし、この全集に収められていない指示があることもわかった。これは政策の一貫性を見せるための処置で、個々の部門で必要な問題にぶつかると個別に指示が出され、公開できる限りのものを全集に収めたと考えている。このため、個人の回想記録をたどることは当初、無意味と考えられていたが、各機関別の教示の存在が公表されないときは、個人の回想が最も手っ取り早い追求方法であることがわかった。これらは言語開発の領域の成果である。

(5)「言語開発」の研究領域では1960年代の漢字語を固有語に置き換える運動が1980年代初めに頓挫したことが研究過程で判明した。この結果1990年代から現在までの北朝鮮における言語政策の揺れを明らかにすることが可能となった。この知見にもとづき広く文献を調査した結果、この政策に従うと、旧世代が書き残した回想、たとえば必読書とされる『抗日パルチザン参加者たちの回想記』やその他の歴史的な文献が直接読めなくなるという問題が提起され、教育を通じて次の世代への「革命伝統」の継承に困難が生じることが理解され、漢字語の教育が党の政策を維持してゆくためにも不可欠であるという認識に変わり、漢字語に対する政策が転換されたことがわかった。すなわち、中国の古典や伝統的な言い回しで普段使わない漢字語を含む熟語も「革命伝統」の継承のために教えられることとなったし、使用されることとなった。またそれ以前に新たに作られた語彙も定着しなかった語彙が多くあることもわかった。1990年代以降は政治の分野では漢字語による新しい語が労働党の文献で多く使われているが、この現象の原因が言語政策の頓挫にあることも判明した。これは辞書の編纂にもあらわれ、1981年に出た『現代朝鮮語辞典(第2版)』には語源として漢字語に漢字の表記は全くないが、それ以降、1990年代に出版された辞書は誤字を含むも漢字語の語源表記は漢字でなされている。この傾向は2010年に出された一般むけの『朝鮮語辞典』にも踏襲されている。漢字語を漢字で語源表記することは始まったが、漢字一字ごとの意味はのせられておらず、現在使われている北朝鮮独自の漢字熟語には

漢字の組み合わせとして異色なものが散見される。

この領域の研究は漢字の廃止と言語に及ぼす影響として発展の可能性がある。

(6)「技法」の領域の研究の一つに領導芸術の研究がある。領導芸術は大衆の労働党に対する献身的な精神を培い、労働党の政策を実現する為に大衆を組織し、動員する能力と手腕を言う。これは事実上、朝鮮文化語でなされている。そこにはさまざまなコードともいえる、符牒がありそれを解明することが領導芸術を解明する手がかりとなる。そこで大衆への宣伝媒体で使われる言語、北朝鮮国内で使われている義務教育用の教科書の言語、積極的に流布された歌謡曲の歌詞を分析し、帰納した。教科書を対象とする研究は、為政者が領導のための文化語のどの部分を重点的に教育し、どう人民に身につけさせているかをさぐり、言語の改造と「言語管理」の実態を探った。

教科書の言語の分析を行った結果、文化語規範が実際に徹底して守られており、指導者、党員、人民、同胞、敵に使われる体言や用言を出来るだけ使い分け、人間を区別し、その区別が当然ことで疑う余地のないように表現が組み立てられていた。同じ歩く姿でも、指導者大股で迷うことなく進み、党員は堂々と歩き、人民は指導者や党員の後から歩き、敵はおっかなびっくりで歩く姿が繰り返して描写されていた。

方言から導入された語彙は低学年の国語教科書にも使われていた。思想教育用の教科書は文章の暗記されるものと考えられるが、そこでは漢字語の固有語への置き換えがとりわけ動詞で積極的に行われ、それにより児童に生き生きと指導者の姿が思い浮かぶよう配慮がなされていた。

歌謡曲の歌詞は語彙の分析を行った後に、為政者が人民にどのような単語や語句を記憶させようとしたか、政治的状況と関連させ、「技法」の実態を明らかにすることができた。歌謡曲は、同じテーマを別の言葉を使い別の歌で、人民の意識の中に幸福感、指導者に対する尊敬などを植え付け、各機関の歌、たとえば学校の校歌などはその機関の政治的役割を曲の終りに入れ、歌うものに政治的自覚をもたせるよう構成されていた。

これらを細かく分析することで、領導芸術の最も隠された部分、すなわち交渉で相手の動きをこちらに有利に動かす言語技術

の解明を試みた。この技術の存在は明らかになっているが、内容はまったく公開されず不明なままの部分であるが、反復と記憶が中核となっているようである。

これらの研究の詳細の公刊は、わが国と北朝鮮との緊張関係とわれわれを取り巻く研究環境を考慮し、現時点では公表可能と思われるものを発表している。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

植田晃次、公式文献に見る平壤文化語における語彙整理の一側面-リンゴの品種名を例として-、批判的社会言語学の方法、大阪大学大学院言語文化研究科 編集・発行、2012年5月、pp. 3-17

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

矢野謙一 (YANO KENICHI)

熊本学園大学・外国語学部・教授

研究者番号：00271453

### (2) 研究分担者

植田晃次 (UEDA KOUJI)

大阪大学・言語文化研究科・准教授

研究者番号：90291450

岸田文隆 (KISHIDA FUMITAKA)

大阪大学・言語文化研究科・教授

研究者番号：30251870